戸津5号窯跡

―石川県古窯跡調査（第4次）概報―

小松市文化財調査報告

第4輯

1975・3

石川県教育委員会
小松市教育委員会
戸津古窯跡調査委員会

Ⅰ　ま　え　が　き

戸津町通称六字ヶ丘の葡萄園内宅地横で、上野さんの指導する松任高校郷土クラブによる窯跡調査を手伝ったのは、昭和25年夏のことである。この調査は本県における窯跡調査の嚆矢にあたるが、須恵穴窯の焚口や煙道部から無ぞうさに遺物をとり出し、焼成室の一部を輪切りにしたり、遺物の厘鉢の用途が理解できないなど、きわめて粗雑な調査であった。また、附近にあった炭窯状の平窯には、頂部中央の煙出し孔のほかに側壁口も煙出し孔が設けられており、この窯が果して須恵窯を意味するのか理解に苦しんだりした。これが本県の窯跡研究黎明期の実態であり、まさに今昔の感にたえないものがある。

本県における窯跡の本格的調査は、浜岡賢太郎、嵯峨井亮、橋本澄夫、吉岡康暢氏等により昭和30年代の後半から能登地区で開始された。代表的なものに高松・押水古窯跡群の黒川窯、鳥屋古窯跡群の春木窯、輪島古窯跡群の洲衛窯などがあげられよう。吉岡氏はそれらの成果に戸津窯跡遺物の再検討を加え、それを福井県の窯跡研究で補強し、昭和42年『日本の考古学』窯業・北陸において北陸の須恵器を８様式に編年し、戸津窯を第７、８様式として平安後期に位置づけた。

上野さんが古墳調査から一転し、南加賀の古窯跡調査に傾倒しはじめたのは、40年代の初めである。これは当地域の開発の急進に伴い、窯跡が破壊の危機におそわれ始めた時期と合致している。同氏は小村君というよき協力者を得、戸津古窯跡を含む粟津古窯跡群から出発し、小松市林町から加賀市松山町にわたる南加賀古窯跡群の実態にせまり、本群が広々と支群数において北陸有数の大古窯跡群であるばかりでなく、古墳期から平安後期に及ぶ須恵窯を経、やがて常滑糸の中世加賀古陶窯に転換し、それが九谷古窯と無関係でないらしいことを明らかにし、本県窯業研究史に金字塔をうちたてた。

ただ南加賀古窯跡群の調査は、少数の研究者による活動であったため、開発に対する保護姿勢に問題が残されていた。石川考古学研究会はこの事態を憂い県教育委員会に窯跡の分布調査と保護対策を要望した。これを受けた県教委は石川県古窯跡調査事業五ヵ年計画を立案し、昭和44年より県単事業として調査を開始した。本調査はその第４年次事業にあたり、粟津支群の分布調査と戸津５号窯による平安時代須恵窯の究明を目的に実施したものである。幸い小松市教委の全面協力のもとに上野、小村、宮下調査員の献身的努力があり、ほぼ所期の目的を達成することができた。本冊子はその一部を概報としてまとめたものであり、各位のご叱正を心からお願する次第である。

南加賀古窯跡群は現在、小松バイパス、葡萄園整備、住宅造成事業等のため、その多くが煙滅の危機に直面しているといっても過言でない。このときにあたり本次調査と本概報が、開発と窯跡保存の調和に新たな展望を与えることを確信するとともに、先年ゴルフ場造成を機に組織された南加賀古窯跡調査委員会の機能を通じ、窯跡保護に積極的対策がとられることを期待するものである。

（高堀勝喜）

II　既応の調査

戸津町周辺において、多量の土器が出土することは以前から知られていた。幕末に書かれた、『江沼志』には「戸津、古陶器を製せし所二カ所有り、戸津焼と云ふ」とあり、相当早くから戸津で窯業を行なっていたことが知られていたのである。しかし、それが今日でいうところの奈良～平安時代頃の須恵器を焼いた窯であることが判明したのは戦後のことである。

まず、昭和25年８月、上野与一、高堀勝喜氏の指導のもとに、松任農学校郷土クラブが主体となって、石川県下で最初の窯跡発掘調査が実施された。これは昭和28年に報告書が刊行された(1)が、報文中に「須恵窯跡」「ワク谷の窯」として記載されている窯跡は、昭和49年の石川県遺跡地図及び同地名表で、戸津１号窯跡と改名された平窯の須恵器窯跡である(2)。これは昭和42年に窯跡実測を目的に再調査された(3)。

昭和35年に至ると戸津地内で平安期に属すると思われる鐙瓦が採集され、その窯跡確認調査が昭和38年７月に小松高校地歴クラブ、片山津中学校郷土研究部、北陸大谷高校地歴クラブ員の参加を得、上野与一の指導のもとに実施されたが、窯体を確認するには至らなかった(4)。これが戸津３号窯跡及び４号窯跡である。３号窯跡からは双耳瓶、甕、４号窯跡より瓦、坏、蓋、台付坏などが検出されている。これにより吉岡康暢氏は北陸地方須恵器編年を確立され、戸津３号窯跡及び４号窯跡を平安時代末期に比定している(5)。

その後、北陸大谷高校地歴クラブ員らは、上野与一、小村茂氏の指導のもと、戸津、那谷、箱宮地区などの丘陵上を精力的な活動によって、従来不明とされてきた中世窯業生産の実態を明らかにされ、須恵器生産が終焉をむかえたのち九谷古窯で代表される近世窯業生産の開始までの空白をうめる作業がすすめられた(6)。現在では、古代・中世を通しての窯業生産の研究は軌道にのりつつある。

しかし、諸開発の波は他地域の例にもれず急速におしよせており、南加賀古窯跡群の形成されている丘陵もにわかに変貌しつつある。昭和45年には前述の戸津４号窯西方の二ツ梨町通称一貫山において土砂採取にともなう緊急発掘調査が実施された。この調査では、奈良時代後半期の須恵器窯跡２基が明らかにされた(7)。このように昭和45年以来、南加賀古窯跡群の所在する丘陵は大きく変貌しつつある。とりわけ昭和44年と昭和47年の二度に亘るゴルフ場造成工事及び果樹園基盤整備工事にともなって破壊された窯跡は20数基におよび、抜本的保護対策が急務となっている。

南加賀において、平安期の窯跡はいまだ調査されておらず、戸津３号窯跡、同４号窯跡にしても窯体は未確認である。また、昭和48年秋に金沢市で開催された日本考古学協会大会の第３分科会（「北陸の中世窯業」）において、「加賀古陶」が詳しく紹介され(8)、あらためて北陸地方における中世窯業の１例として加賀古窯が認知されるようになった。

加賀古陶の操業開始の時期についての証左に確定的なものはないが、昭和44年、加賀芙蓉カントリークラブ第１次ゴルフ場造成工事にともなう緊急調査で明確にされた二ツ梨町奥谷１号窯跡

の出土土器が、越前、常滑古窯の出土土器の比較検討から平安時代末期には既に操業を開始していたことを裏付けている。このことは、とうぜんながら古墳時代より環元焔焼成という一貫した操業過程をとおして生産されてきた須恵器との関連性をも重要視させる結果となった。

このような情勢のもとで、石川県教育委員会と石川考古学研究会の共同で実施されている石川古窯跡調査5カ年計画の一環として、昭和49年、戸津地内において平安期に属する戸津5号窯発掘調査が行なわれた。(宮下　幸夫)

註(1)　松任高校郷土クラブ『戸津古窯跡調査報告』（昭和26年）

(2)　石川県教育委員会『石川県遺跡地図』『仝地名表』（昭和49年）

(3)　小村茂・上野与一「石川県戸津町地下式平窯調査報告」古代学研究50（昭和43年）

(4)　小松高校地歴部「小松市戸津古窯遺跡発掘調査予報」石川県高等学校文化連盟郷土部会報2（昭和37年）

北陸大谷高校地歴クラブ「小松市戸津古窯遺跡調査予報」北陸大谷高校地歴クラブ紀要1（昭和41年）

(5)　浜岡賢太郎他「古代・中世における手工業の発達—窯業・北陸」日本の考古学Ⅵ（昭和42年）

(6)　上野与一・小村茂「加賀古陶」日本考古学協会大会研究発表要旨（昭和47年）

上野与一「南加賀に於ける信頼性への追試」古代学研究58（昭和45年）

(7)　小村　茂『二ツ梨一貫山須恵器窯跡発掘調査概報』小松市文化財調査報告書1（昭和46年）

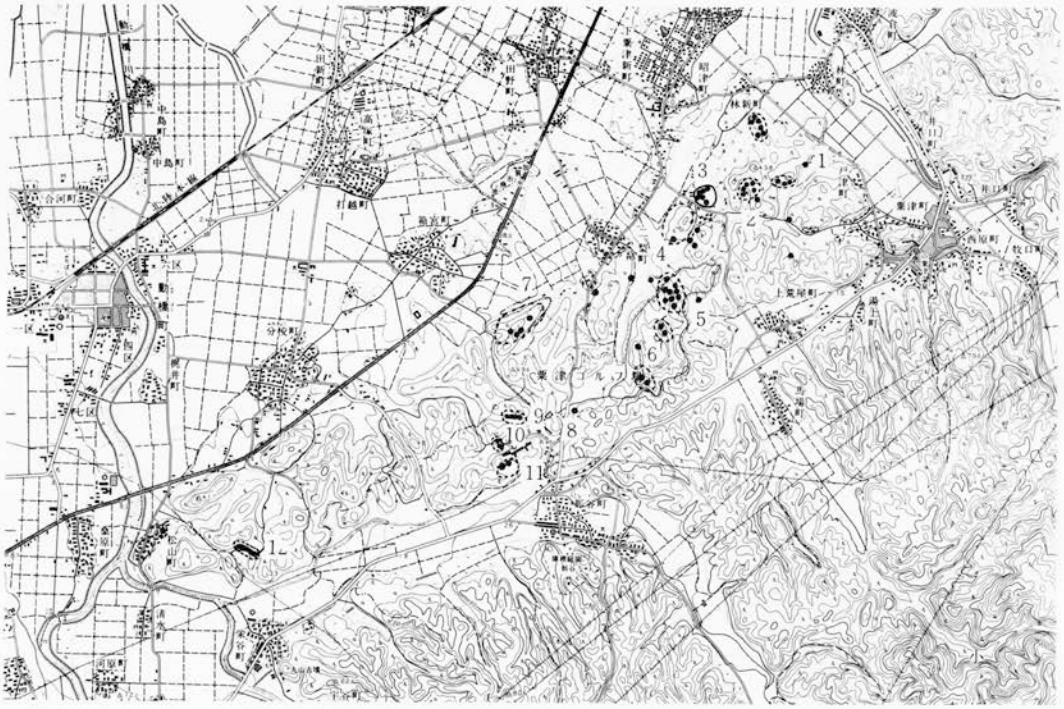
(8)　小村　茂・上野与一「南加賀古窯跡群大天王谷支群の調査」日本考古学協会大会研究発表要旨（昭和48年）

上野与一「加賀古陶—加賀中世の窯業について—」金沢大学日本海域研究所報告5（昭和48年）

Ⅲ　位置と周辺遺跡

遺跡は石川県小松市戸津町ヨの部に存在する。現在、上田庄一氏所有の雑木林である。

本窯は戸津町の北西約500ｍ、粟津温泉より林新町を通り、国鉄粟津駅へ至る旧北陸鉄道粟津線軌道敷跡の道路の西側に位置している。



南加賀古窯跡群主要窯跡分布図

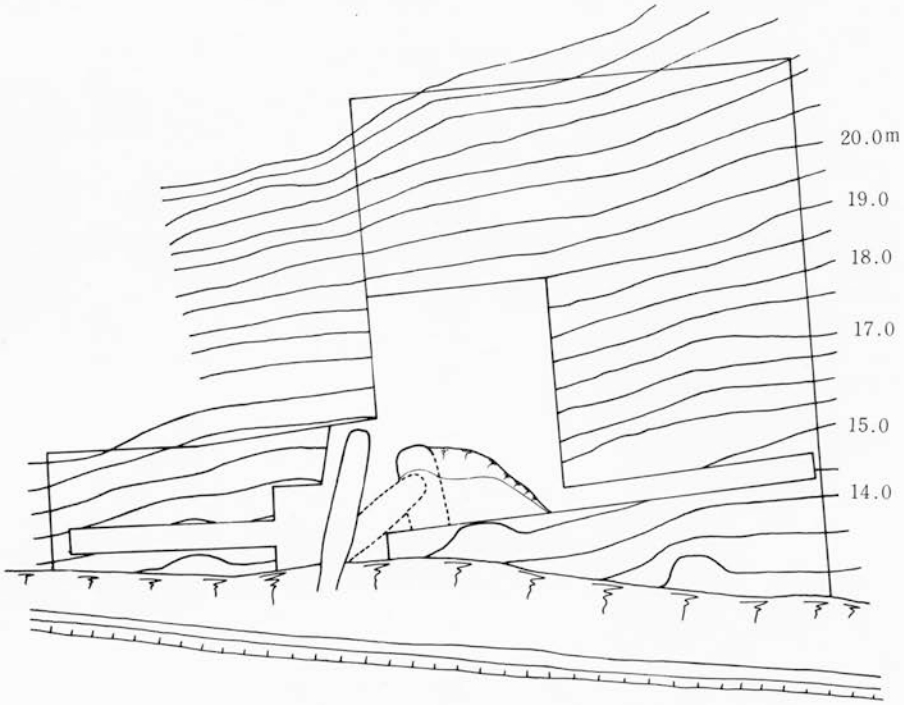
1　戸津５号窯跡（平安）
2　六字ケ丘古窯址群（平安）
4　一貫山古窯址群（奈良末～平安）
4　豆岡山古窯址群
5　二ツ梨古窯址群（仮称）
6　奥谷１号窯跡（平安末～鎌倉前）
7　箱宮古窯跡群（奈良～中世）
8　那谷１号窯跡（鎌倉）
9　小天王谷古窯址群（中世）
10　大天王谷古窯址群（鎌倉）
11　カミヤ古窯址群（中世）
12　分校古窯址群（古墳）

南加賀平野は、矢田野町付近で東南に、白山前山地帯に深く谷を形成する。粟津温泉はこの谷の中程に位置している。遺跡はこの谷の西側に入りこむ一支谷の中程北側に位置している。

この深い谷より西側で、国道八号線と粟津より那谷寺を通って山代に至る道路の北側にはさまれ、林町より加賀市松山町まで低い丘陵が連なっている。これが南加賀古窯跡群を形成している丘陵である。戸津町はその北東端近くに位置し、奈良時代～平安時代の窯跡が集中している地域である。

本遺跡の南西約300ｍに「六字ケ丘」という独立丘があり、ここは昭和38年に調査された際、窯体は検出されなかったが、双耳瓶などが多量に出土した戸津３号、４号窯跡など10基近くの須恵器窯跡が存在している。その南西には須恵器窯としては類例に乏しい地下式平窯の形態をもつ戸津１号窯跡が存する。また、六字ケ丘より丘一つこえた西側には、奈良時代末期より平安時代初

めにかけての須恵器窯跡群のあった通称「一貫山」がある。二ツ梨町には「一貫山」の他に須恵器窯跡が18基発見されているが、他にも存在していたと思われる。これらは未調査のまま現在ほとんど消滅してしまった。



第2図 窯跡付近地形図　（縮尺　1：300）

その他の遺跡として、六字ケ丘には縄文の散布が見られる。また、北約1.2kmの位置には古墳時代より続く島遺跡があり、須恵器、陶質土器の出土する集落跡である。

小松市南部には、8基からなる借屋古墳群や前方後円墳の蓑輪塚古墳、円墳の念仏林古墳など豊富な須恵器を出土した古墳が存在していた。これら古墳時代後期～末期の遺物の須恵器、またそれ以前の須恵器を焼いた窯は粟津周辺では未だ発見されていない。あるいは他で焼かれて搬入されたのかも知れないが、今後の課題としてこれら古墳時代の須恵器窯を追求することも必要であろう。　（宮下　幸夫）

Ⅳ　調査日誌

10月2日　現地伐木を開始する。

10月3日　伐木完了。

10月4日　地形測量に入る。午後窯体確認のため試掘溝を設定した。

10月5日　地形測量を継続し、午前中で終わる。試掘溝を掘り下げた結果、焼土や灰を検出し

たので、その個所を中心に拡張し、表土除去を行なった。灰層中より双耳瓶、坏、皿破片多数出土する。

10月７日　表土除去を継続し、灰層の広がりと窯体検出作業を急いだ。灰層中には窯壁片や焼土、遺物などが検出されたが窯体は確認出来なかった。また、やや上方にも試掘溝を入れたが、窯体は検出出来なかった。

10月８日　灰層の広がりをほぼ確認出来たので、その掘り下げを行なう。遺物は短頸瓶、坏、長頸瓶、双耳瓶の破片多数である。

10月９日　雨で出土品の整理を行なう。

10月11日　灰層の追求の結果、７号窯の窯尻部を検出した。本窯は窯尻部しか残存していなく他の窯によってこわされたものと判明した。遺物は皿、坏、双耳瓶、蓋などであり蓋では今まで発見例がない肩に突帯のめぐっているものが検出された。

10月12日　７号窯の窯尻部の清掃と、その下方を追求した。その結果、７号窯の焼成部の床面が確認された。また、それを切っている６号窯の床面が検出された。６号窯と７号窯の間には若干の粘土が認められた。それと並行して、南西側のやや離れた部分の伐採をし、試掘溝を入れてみたが遺構は検出されなかった。

10月14日　前日試掘溝を入れた個所と、６・７号窯の間にある５号窯の掘り下げを開始した。窯底より坏、皿などの破片を検出。

10月15日　５号窯の掘り下げを続行する。窯尻部は表土をはぐともう窯底であり、煙り出しは検出出来なかった。焚口部は天井が残っていた。遺物は坏、皿であった。

10月16日　焚口部の埋土を除去する。焚口部はほぼ残存していたが、灰原は道路をつけた際けずられていた。後、清掃をし、写真撮影を行なった。

10月17日　窯の写真撮影を行ない、そののち実測を開始した。また、５号窯の焚口近く外側にもう一つの壁面が検出された。これは６号窯のものであることが判明した。したがって、各窯の時間は７号窯が古く、６号窯、５号窯と続くものである。

10月18日　５号窯の断面図を作成した。また、５・６・７号窯の関連図を測量した。中田補佐、河崎係長現地を視察。

10月19日　雨のため遺物の整理、器材の点検、引き上げ準備を行なう。

10月20日　５号窯をのこし、他の埋めもどしを開始する。

10月21日　雨のため、作業中止。高堀氏、河崎係長、平田主事視察。

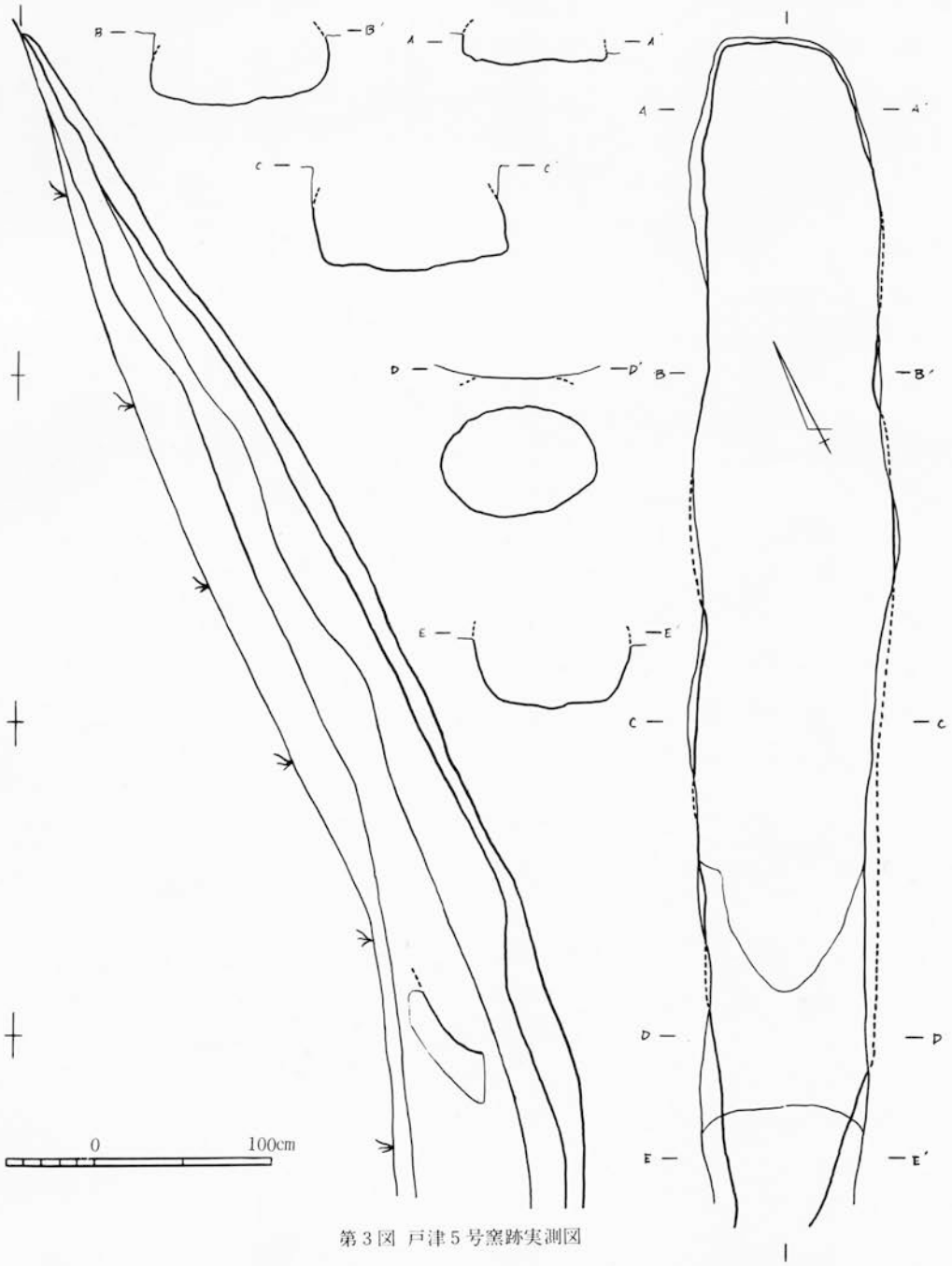
10月25日　戸津古窯跡発掘調査委員会を開く。現地保存の対策と、報告書の件について協議する。その中で「現在のところ、６・７号窯は平安前期頃、５号窯も同時期頃、しかし、終末期ではないもよう」という有意義な意見が出された。

10月26日　埋めもどしを本格的に開始する。

10月　日　埋めもどし完了、器材を引き上げ調査完了。（宮下幸夫）

V　窯体の構造

今回の発掘調査で顕現された窯跡は３基であり、互いに切り合っているため、窯体の全容が明らかにされた窯跡は戸津５号窯跡だけである。構築順序は、７号窯跡→６号窯跡→５号窯跡となるが、保存等の事を考慮し、破壊することを極力避けて完掘を敢えて実施しなかった。したがって、窯体の構造は戸津５号窯跡を中心に、その構造・規模等の概略を述べたい（図版Ⅰ、Ⅱ）。



第３図　戸津５号窯跡実測図

発掘調査された窯跡は、南加賀古窯跡群北東ブロックの戸津地内古窯跡群に属する窯跡で、昭和38年、窯跡調査が実施され、北陸地方須恵器第Ⅲ型式第Ⅷ様式として編年的に位置付けされた戸津4号窯跡(1)の東方丘陵に位置する。戸津5号窯跡は主軸方位をN—26—Eにより、全長約6mを測る半地下式の形態に属する(2)。灰原は圃場改善事業で既に破壊されており、煙道部付近は畑地化のための開墾で遺存状態が悪った。幸い、焚口より燃焼室にかけては天井部及び側壁がほぼ完全な状態で検出できた。

(1) 焚口および燃焼部

焚口附近の遺存状態は良好で、側壁及び天井部は完全な状態で残存していた。床面は前庭部より約3度で緩く下降し、焚口直下で最も深くなり、燃焼部にかけて約20度の勾配で上っている。焚口巾は床巾で約0.9m、高0.5mである。燃焼部より焚口にかけての床面に、僅かながら舟底状の凹みが認められるほかは目立った施設はない。

(2) 焼　成　部

床面傾斜角度が変ずる焚口より約1mの地点で、一応燃焼部と区別する。床巾は燃焼部との境より約2mの地点で最大巾となり約1m15を測る。傾斜角度は燃焼部との境より約25度の勾配で窯尻に至る。両側壁の遺存度は窯上部で悪く、部分的には崩落していた。

(3) 煙　道　部

煙道は築窯当初、地上に完全露呈していたと思われ、調査時には既に崩落していた。焼成部との区別は不明瞭であるが、二ツ梨町一貫山1号窯跡のように、窯尻まで製品を窯詰めするのが一般的である。

(4) 前庭部及び灰原

前庭部及び灰原は、圃場整備事業で既に削土されており、焚口より約1mの前庭部を残すのみであった。

(5) 6号窯跡は主軸方位を西—東にとり、5号窯跡と焚口を共有している。焚口は5号窯跡よりやや大きく、巾約1mを測る。焼成室中央左壁をわずかに残すほかは崩落しており、全容を知り得ない。

7号窯跡は5号窯跡とほぼ平行に構築されているが、6号窯跡築窯時に大半が削平され、煙道部直下がわずかに遺存した。

(6) 付　属　施　設

5号窯跡東側、焚口より一段高い位置に、地山を掘り削った平担面が検出された。

この平担面は、地山を約30～65cm程度掘りくぼめた半楕円形の堅穴状遺構と思われるが、南半が削り取られているため、正確な規模等は不明である。平担面全体に、焼土や灰とともに多量に須恵器片の堆積が認められたほか、南西隅において、白色粘土の堆積と砥石が発見されている。

平担面上面には、溝や柱穴などの内部施設もないところから、この平担面の詳細にわたる性格は不明であるが、窯跡と密接な関係にある遺構であったと考えてよいであろう。ただ、土師器甕が1点検出されているが、平担面の性格を明らかにするうえで考慮する必要がある。

さて、以上で戸津5号窯及び付属施設の概略を述べたが、ここで若干の知見を述べておきたい。

北陸地方の須恵器編年で第Ⅴ様式に比定される窯の調査例はいまだ県下においては管見にふれていないが、南加賀古窯跡群内で既に発掘調査されている例(3)を参考に戸津5号窯との規模を比較すると、第Ⅴ様式から第Ⅵ様式にいたると窯規模が約4割減少し、縮少化の傾向を示している。このことは能登地方においてもいえることであって(4)、今後も留意したい点である。また、南加賀古窯群でいえることであるが、第Ⅴ様式に属する窯が5～6基で構成され比較的まとまりのあるグループを形成するが、次の第Ⅵ様式では2～3基で1グループを構成する現象がみられる。この点についてもさらに検討すべき要素を多分に残している。これらについては次項でその背景を考えてみたい。　(小村)

註(1)　浜岡賢太郎他「古代・中世における手工業の発達—窯業・北陸」日本の考古学Ⅳ（昭和42年）
発掘調査の結果、窯体は未確認であるが、双耳瓶の多量の出土があり、窯体の検出が期待される。

(2)　半地下式は丘陵の自然傾斜面を掘りくぼめ天井部をスサ入粘土で構築するものであるが、本窯では焼成中央よりやや上方まで自然傾斜面を掘りくぼめて構築し、煙道部付近は地上に完全露呈させる構築法をとっている。すなわち、半地下式と地上式の形態をそなえている須恵器窯である。

(3)　二ツ梨一貫山1号窯は全長10m、幅2.3mを計る半地下式登窯で同2号窯でもほぼ同様の計測値をえた。

(4)　註(1)と同じ。
黒川2号窯跡の計測値を示すと、全長7m、幅1.2mである。

Ⅵ　遺　　物

遺物は窯内出土の小量の坏・蓋類を除けば、他は総てテラス状遺構床面及びその覆土中より出土したものである。器種としては、坏・蓋・台付坏・皿・盤類と鉢・瓶・壺類に大別できるが、量的に多い供膳形態をのぞけば、瓶・壺類の存在が目立つ。

須恵器の分類方法は形態及び技法の観察をとおして区分するものであるが、形態的差異A類・B類・C類……と分類し、技法及び法量の大小でさらに細分し、a類・b類・c類……とした。ただし焼成度合や焼成時の粘土収縮にともなう法量の差異が生じたと考えられる場合、誤差の程度によって、形態、技法が近似するものを同一とみなした。

1　5号窯跡出土須恵器

5号窯跡出土の須恵器は少く、整理箱1箱分にも満たないほどである。器種別にみると、総

てが台付坏・蓋・皿・坏類などの供膳形態に属するもので、なかでも台付坏及び皿類の出土量が多い。製品以外に埦形窯道具があるが、概略は後述する窯道具で述べる。

坏類（３）　口径16.5cm、器高６cm。比較的小さな貼高台から８mmほど横へ張り出した器体が緩くカーブして立ち上り、器体上位で幾分外反しつつ丸く仕上げた口縁上端につらなる台付坏の平均的タイプを示す。砂粒をわずかに混じえた胎土は焼成堅緻で青灰色を呈する。底面はていねいに篦削りされている。

蓋類（１・２）　口径16.3cm～16.5cm。器高５cm前後。鈕より緩く下降する器体が肩で明瞭な稜をなさず、嘴状に屈折する口縁を形づくる。胎土に石英微砂粒を多量に混じえるものの焼成は良好である。天井部外面を入念な篦削で成形しているが、内面にはわずかに巻上げ痕をとどめている。

盤類（４）　口径15.5cm、器高1.7cm。肥厚な底部より緩くカーブしてたち上る器体は低く、口縁がわずかに内湾ぎみである。胎質、焼成ともに普通である。

２　テラス状遺構出土須恵器

１　盤　（５～９）

盤A（５、６）　口径18.7cm～19.5cm、器高3.2cm～3.9cm。広い底部に高台を付するので、砂礫をほとんど混じえない精良な胎土を用い、焼成堅緻で、灰色を呈する。

盤Aａ（５）　がっしりとした丸味のある高台から６mm横へ張り出した器体はほぼ直線的に先ぼそりの口縁端につづく。底部中央にへたりがみられる。器内外面ともに篦削りにより稜を生じている。

盤Aｂ（６）　両端に張り出す小さな高台を有するもので、幾分内湾ぎみに先ぼそりの口縁にいたる。焼成・胎質及び篦削り技法はＡａ類を上回る。量的にはわずかである。

盤B（７～９）　口径16.2cm～16.5cm、器高２cm～2.5cm。底部に高台を付さないもので、ほとんどのものが胎土に微砂粒を多量に含有する暗灰色を呈するものである。

盤Bａ（７、８）　わずかに丸底状を呈し、立上りも緩いカーブを描いている。器内面に篦削りによる稜が目立つが、水引き痕を残している。

盤Bｂ（９）　薄手平底で、胎土、焼成ともに良好で、器表全体を篦削りで入念に仕上げている。

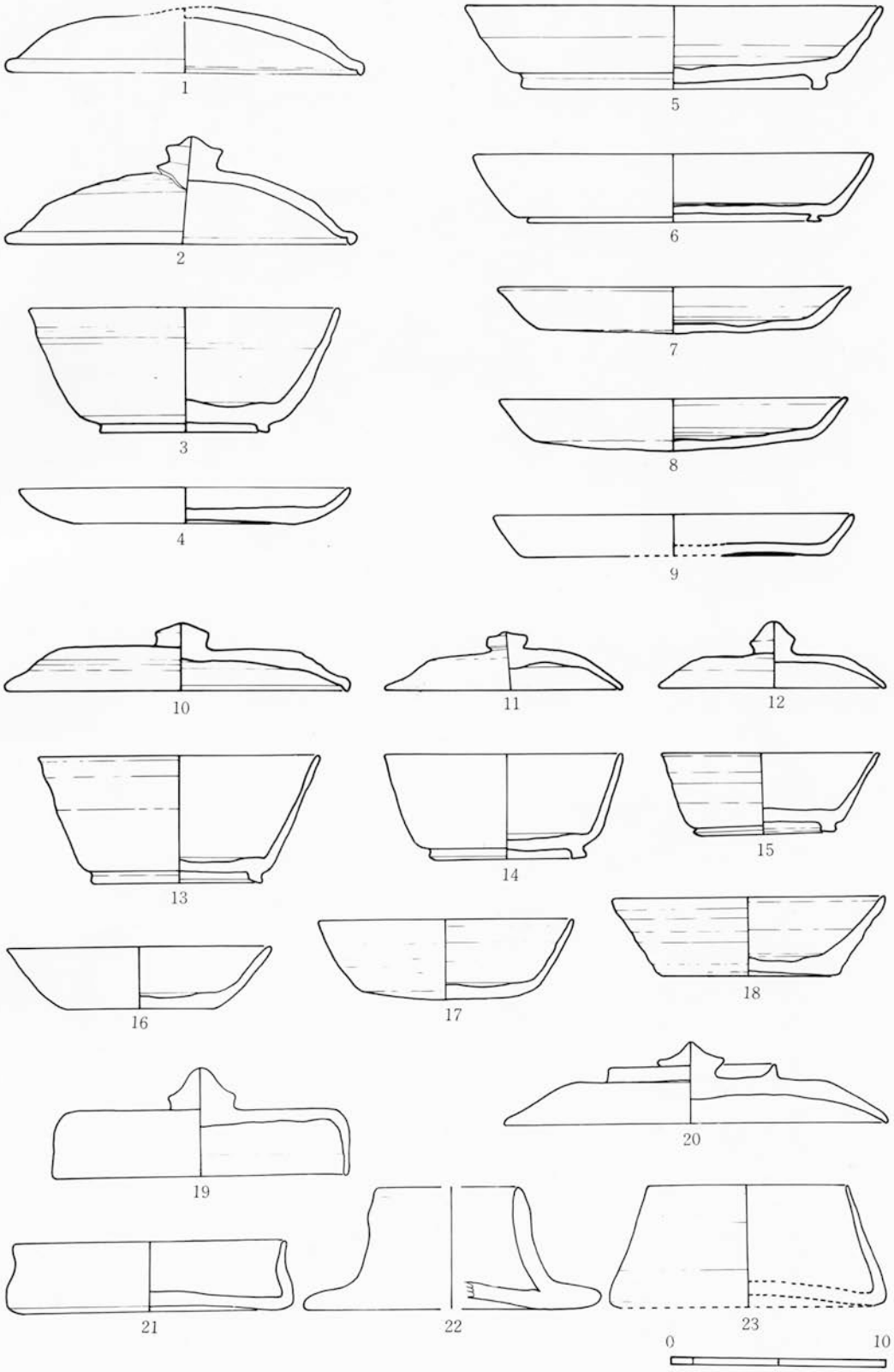
２　坏　（13～18）

坏A（13～15）　口径10.2cm～13.1cm、器高3.8cm～６cm。胎土に微砂粒を多量に含有し、焼成良好、青灰色を呈するものが多い。法量の大小によりａ～ｃ類に細分する。

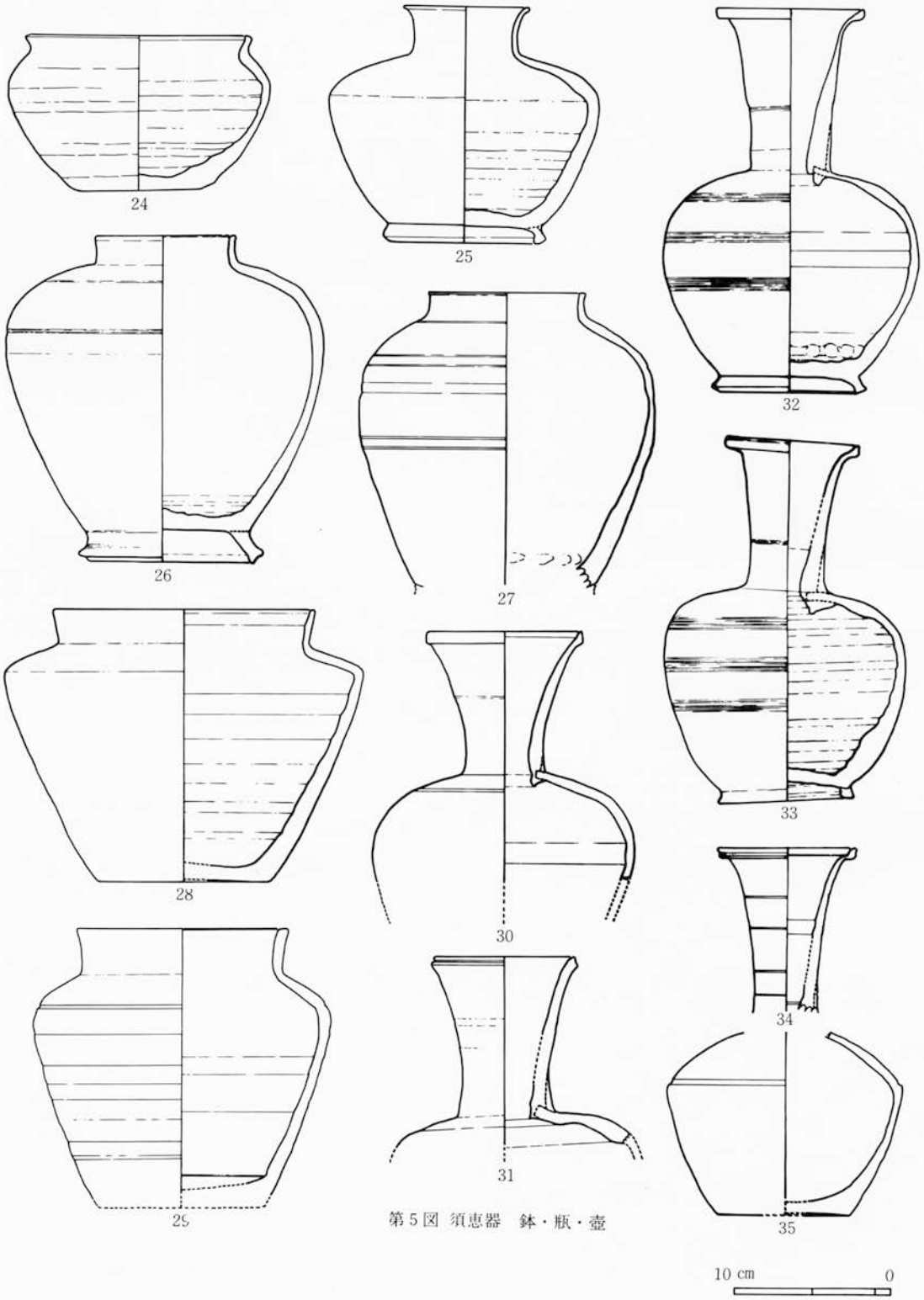
坏Aａ（13）　内傾する貼高台より直線的に先ぼそりの口縁端に連なる。器形全体を入念な篦削りで薄手に仕上げている。

坏Aａ（14）　貼高台から直線的に口縁に至るもので、底部底面に巻上げ痕をわずかに残す。

坏Aｃ（15）　外方へ張り出す貼高台から真直ぐにのびる器体は先ぼそりの口縁端につづく。

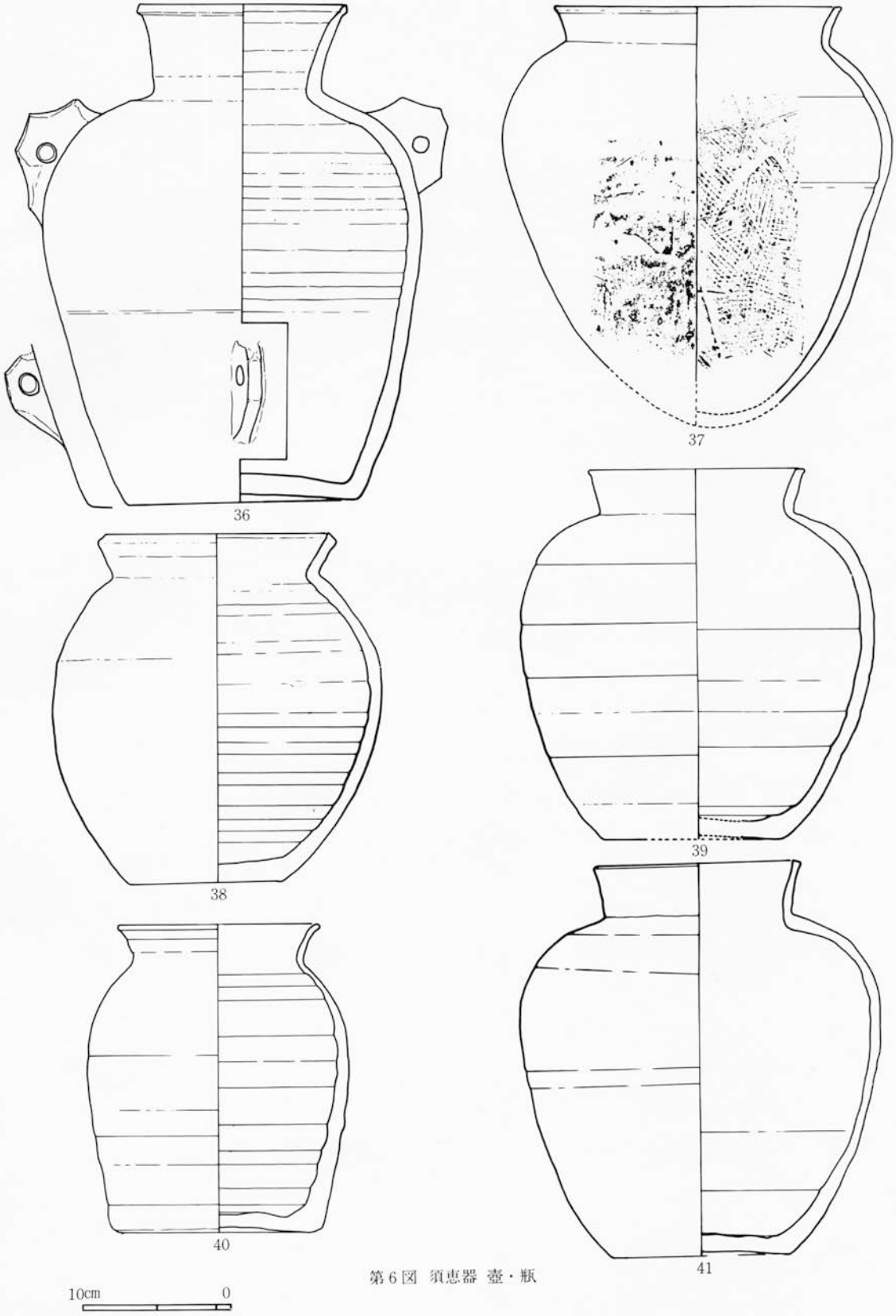


第4図 須恵器〈台付坏・蓋・盤・坏・窯道具〉 （1～4、23 戸津5号窯出土）



第5図 須恵器 鉢・瓶・壺

胎土に石英微砂粒をわずかに含有し、焼成堅緻、灰白色を呈する。器形全体に篦削りを施し、入念な水引きで仕上げる。



第6図 須恵器 壺・瓶

坏B（16～18）　口径12cm～12.3cm、器高３cm～3.7cm。無台の坏である。胎土に多量の砂粒を含むものが多いが、焼成良好、灰白色～青灰色を呈する。出土量は多いとはいえない。底部に篦削り成形を加えないものが多い。

坏Ｂａ（16）　緩く立上る器体がやゝ肥厚な口縁端につづく。胎土にわずかに砂粒を含み、焼成良好、灰色をなす。口縁が黝灰色をなし、重ね焼きの証跡をうかがうことができる。胴部及び内面全体は入念に篦削りされているが、底部にはまったく施されず、巻上げ痕をそのまま残している。

坏Ｂｂ（17）　器体の外傾度は坏Ｂ類より大きく、器面全体をていねいに篦削りしているが、胴部に細かい稜を残している。胎土に石英微砂粒を多量に含有している。底部に巻上げ痕をまったく認めえないほど研磨している。

坏Ｂｃ（18）　上げ底状の底部から直線的に肥厚く丸味をおびた口縁端に連なる。底部底面の調整は粗雑で坏Ｂａ類に共通するが、器内外面ともに巻上げ痕が明瞭である。焼成堅緻、青灰色を呈し、胎土に砂粒をほとんど含まない。本類はこれ１点の検出である。

３　蓋　（10～12・19・20）

蓋Ａ（10）　平担で広い天井部を有し、肩のはりも比較的明瞭である。扁平宝珠を有する。口縁端は嘴状に屈折し口縁の退化した形状を示している。焼成堅緻、胎土に大つぶの石英砂粒を含み、灰色を呈する。外面全体に淡緑色の自然降灰釉の付着をみる。口径14cm、高さ3.2cm。

蓋Ｂ（20）　口径12cm、器高3.9cm。肩が張って口縁先端がなだらかにのびる。平担で広い天井部に高さ６mm程度の凸帯をめぐらす特異なものである。胎土が精選され焼成堅緻で灰色をなす。焼成、胎土、成形ともに優品であり、注文品であろう。

蓋Ｃ（11、12）　口径10.6cm～11.1cm、　高2.3cm～3.2cm。口縁先端かなだらかにのび、肩に明瞭な稜をなさない。胎土、焼成ともに精良である。坏Ａｃ類とセットになる。

蓋Ｄ（19）　口径13.2cm、器高5.1cm。薬壺の蓋であろう。平担な天井部から屈折して垂直な口縁部を形造る。胎土はよく精選されているが、焼成はやや悪い。高２cmの宝珠を有する。器外面全体に淡緑色の自然釉がおおっている。本類はただ１点の出土である。

４　鉢

鉢（24）　口径14.5cm、底径7.7cm、器高10cm。頸部からわずかに外反し、口縁端を篦で削り出すもので、胎土にわずかに微砂粒を含み、焼成やや不良であり、黄白色を呈している。内面に極めて明瞭な巻上げ痕がみられるが、外面はていねいに篦削りで仕上げている。同種のものは他に１点あるが、法量が上回る。

５　瓶　（26～36）

瓶類として、短頸瓶、長頸瓶、肩衝瓶、双耳瓶を包括した。しかし従来、壺類として取り扱われてきたものも含むが、機能的用途が不明のまま便宜的に分類したのであって、たいした意味はない。以下、形態的に分類し、技法等の差異によりさらに細分する。

短頸瓶A（26）　口径９㎝、底径10.5㎝、器高21㎝。外方へ強く張り出す貼高台が緩くカーブして上方にのびる器体は頸部で垂直に立上る。器外面全体は入念に成形されており、口縁端外方に小さな張り出しが認められるほか、肩より胴部下半にかけて、篦により３条の細い沈線をめぐらしている。内面はていねいに水引きされているが、底部付近にわずかに巻上げ痕をとどめている。本類は他に１個体検出されているが、26は完好品である。

短頸瓶B（27）　口径10.1㎝、器高推定21㎝。焼成粗悪で茶褐色を呈する。肩部の張りが短頸瓶Ａ類より弱い。底部内面に指頭成形痕をとどめる以外、調整技法は短頸瓶Ａ類とほぼ同様である。他に２個体検出されている。

肩衝瓶A（28）　底部を欠損しており、また、上下にへたっているため実際より肩の張りが強い。口縁はわずかに外反し、口縁頂に面取りを施している。焼成堅緻で胎土に小量の微砂粒を含有する。器表に入念な篦削りが施されている。

肩衝瓶B（29）　口径13.5㎝、器高推定18㎝。底径は欠損しているため不明。肩部はなで肩で、外面に巾広い浅い沈線をめぐらしている。調整技法は肩衝瓶Ａ類と同様である。

長頸瓶A（30～33）　胴部が球形に近い形状を呈するもので、胎土、焼成ともに精良で、器形全体が濃緑色の自然釉でおおわれるものが多い。頸部接合部分より緩く弓なりに外反する長頸瓶Ａａ類と頸部上方で反転して鋭く外反する長頸瓶Ａｂ類に細分する。

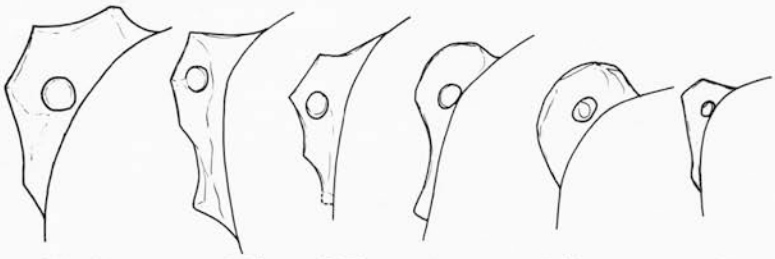
長頸瓶Aａ（30、31）　器形の全様を知り得るものはない。肩部から頸部にかけて入念な篦削りを施す手法は各類に共通する。口縁をけずりだして先ぼそりの口縁端を形成している。30は胎土に多量の微砂粒を含み、青灰色を呈する。口縁外面に篦削りによる段をもつものがあるが、概して、口縁帯をめぐらすものが多い。

長頸瓶Aｂ（32、33）　両端に張り出す貼高台を有し、胴部と頸部の接合部分を粘土で補強しているため、肥厚に仕上っている。内面底部に指頭痕を残すほか、球形の胴部中央から肩部にかけて、３段に数条の細い沈線を施し、頸部中央にも１条の沈線をめぐらしている。胎土、焼成ともに精良で、器表を濃緑色の自然降灰釉がおおっている。

長頸瓶B（34、35）　平底から緩く立ち上る器形は肩部で屈折して明瞭な稜をのこす。高台は欠損しているため不明。肩に篦による太く細い沈線をめぐらす。頸部は欠損しているが、34に近いものと思う。頸部が長頸瓶Ａｂ類に比して細く、頸部上部で鋭く外反する。胎土に多量の石英微砂粒を含み、焼成堅緻、灰白色を呈する。他に２個体分が検出されている。

双耳瓶A（36）　口径14㎝、底径15.5㎝、器高33.7㎝。大形品にかかわらず薄手に仕上げている。胴部中央より肩部にかけて入念に篦削りされている。底部内面を指頭でなでつけている。胎土、焼成ともに精良で灰白色を呈する。胴部下半に１個の耳形把手を付す特異なものである。他に器高40㎝をこす同種のものが１点ある。

双耳瓶B　図示しなかったが、長胴型を呈する双耳瓶である。焼成、胎質ともに双耳瓶Ａ類と同様である。



第7図 双耳瓶各種耳形把手実測図

双耳瓶C　小破片であり器形全体を推察しえないが、耳形把手の形状で分類した。胎土にわずかな砂粒を含み、焼成良好、青灰色を呈する。

双耳瓶D　半円形に近い形状をもつ把手である。肩部を丸くなで肩に仕上げている。胎土に多量の微砂粒を含み、焼成粗悪である。

6　壺　(37～41)

壺A（37）　口径19.4cm、器高推定28.5cmで丸底の壺である。外面胴部以下に格子目状のタタキがあり、肩部から口縁部にかけて入念に篦削りされている。内面は全体に同心円状のタタキが施されているが、上半部はすり消されている。胎土は精良で、焼成堅緻、青灰色を呈する。同種のものは他に2個体出土している。

壺B（38）　口径15cm、底径10.2cm、器高23.5cm。体部は球形に近く、内外面ともていねいに篦削りされている。口縁端が外傾する点は他類と異なる。頸部及び内面に篦削りで生じ稜を残す。焼成堅緻、全面が自然釉で覆われている。

壺C（39、41）　径14cm～14.5cm、高さ25cm～26.7cm、底径11.8cm。胴部最大巾はやや上位に位置し、比較的肩の張る器形を有する。巻上げ痕をとどめているが、その上を篦で入念に調整するものが多い。口縁端に巾広い面取を有する。胎土に多量に微砂粒を含むが、焼成は良好で、青灰色を呈する。同種のものは他に4個体ある。

7　窯道具　(21～23)

窯道具A（21）　口径13.5cm、器高3.3cm。底部より垂直もしくは内反し、器体中央から反転してわずかに外反する。無台の瓶類に使用されるものが多いようである。21より法量がひとまわり小さいものもあるが、量的には少い。

窯道具B（22）　底部を作出したのち、立ち上り部分を接合するもので、断面は鋭い逆くの字状を呈する。焼成堅緻。

窯道具C（23）　底部より直線的に内反し、薄い口縁を有する。これは焼成後の取りはずしを考慮したもので、どのような器種の焼成に用いられたものかは明らかでない。口径9.4cm、高さ5.8cm。（小村　茂）

Ⅶ まとめ

(1)

戸津5号窯跡は、南加賀古窯跡群の最東端のブロックに属する須恵器を生産した古窯である。窯跡の規模は、煙道部が流出しているが、全長6m、窯最大幅1mを計り、床面の傾斜度20～25度である。部分的には修復個所が認められるが、大幅な改造はない。この窯規模を既に検出されている窯と比較すると、第Ⅴ様式に属する二ツ梨、一貫山1号窯跡では全長約10m、幅2.3mであり、さらに第Ⅵ様式の標識となる河北郡高松町黒川第2号窯跡になると、長約7m、幅1.2mと小規模になる。すなわち、第Ⅴ様式では比較的広大な窯を構築し、器種的には既に量産体制を整えていた須恵器生産も第Ⅵ様式にいたると窯規模は縮小化の傾向がみわれる。このことは需要の停滞にともない窯の縮小化現象と言い切れないものがあり、須恵器工人集団内部での拡散化、個別化が助長された結果、家内（家族単位）生産に移行していく過程でとらえられないであろうか。つまり、原料陶土の濫掘、燃料資源の枯渇はもはや集団としての工人組織を維持する限界をこえ、土地の条件付き私有を公認した奈良中期以降、窯業生産をささえた山野がしだいに郡領級富豪層の占有に帰しつつあったことを考えあわせれば、須恵器生産者としての班田農は実質的に国家機構から遊離して、個別的に再び富豪層に掌握されていった結果、操業の条件が最低に保障されていたにしても、操業規模は著しく縮小せざるをえなかったものと理解したい。また、須恵器工人が集団組織の崩壊とともに労働力の面で極めて小単位生産に移行していくことを前提に考えるとき、第Ⅴ様式では1グループが5～6基で構成されているにもかかわらず、第Ⅵ様式にいたると2～3基の小単位構成に移行する現象も容易に理解できるのではあるまいか。

(2)

焼成された須恵器を大別すると、盤4種、坏6種、蓋4種、鉢、短頸瓶各2種、肩衝瓶2種、長頸瓶3種、双耳瓶4種、壺3種に分けられ、甕類の出土はない。各器種による量的比率についての詳細は分類作業なかばで明らかにならないが、他の窯との関連で器種構成の変遷をたどってみたい。第Ⅴ様式に属する一貫山1号窯、同2号窯では、台付坏、蓋、坏が量産されており、約200個中の供膳形態が占める比率は100%であり、次の第Ⅵ様式の標識とされる河北郡高松町黒川第2号窯では、約200個体のうち、坏が95%を占め、他に双耳瓶、薬壺、肩衝壺、鉢が小量出土している。さらに第Ⅶ様式の輪島市洲衛1号窯になると、台付坏、盌が10%に減小している。戸津5号窯跡では、盤、坏、蓋類は約70%を占め、これに双耳瓶、肩衝瓶、薬壺、短頸瓶などがともなっている。このように供膳形態の焼成比率が減小していく傾向はみのがせない。また、供膳形態の比率の減小とともに、双耳瓶、薬壺、長頸瓶、短頸瓶など、器種の分化が捉進されていることも事実である。また、同一器種内での器形の多様化現象も、すでに量産体制にあった坏、蓋、盤類の生産にやゝ遅れ、以前として需要対象の不確定的要素に基因しているものと推測できる。しかし、双耳瓶、長頸瓶、短頸瓶などの生産量が、第Ⅴ様式より相対的に増加することは、被生産者

層がわずかながら確実的になりつつある傾向を具象化するものであり（かならずしも、供膳形態を必要とする需要層ではない）、第Ⅶ様式にいたると、量産体制にあった日常雑器の生産が停滞し、一方では、双耳瓶、短頸瓶、長頸瓶が寺院や富豪層の需要に支えられて安定してくる。このことは輪島市洲衛１号窯で、わずかながら寺院を需要対象とする祭器類の生産が開始されていることからも推測されよう。

以上のことから、戸津５号窯が操業した時期は、従来の須恵器需要対称が富豪層や寺院などに移行しつつある段階であり、平安時代前期（ＡＤ８末～ＡＤ９前期）と考えたい。（小村　茂）

(3)

戸津５号須恵器窯跡が存在する　白山山系の前山地帯は小松市戸津町から加賀市松山町に至る東西1,000ｍ、南北5,000ｍ、海抜50ｍ前後の低丘陵である。

丘陵の南方、加賀市分校町地内に39基の古墳があり、５世紀末か６世紀初めと推定される銅製方格規矩四神鏡が出土した円墳があり、丘陵下端縁に築造された全長36ｍの分校高山の前方後円墳は５世紀末と考えられている。

このような古墳文化を背景として耐火土にめぐまれた丘陵地域内に、130基を越える須恵器窯跡から室町時代に至る中世窯跡が存在しているが、その正確な実態が把握されていない。

丘陵内の窯跡の調査は既往の調査の項で宮下がふれており重複するが、須恵器窯跡では小松市戸津１号窯跡（平安後期）、同二ツ梨一貫山１、２号窯跡（奈良後期）、二ツ梨（オクダニ）８号、10号、13号窯跡（奈良後期）、加賀市分校１～６号窯跡（６世紀末）、箱宮３号、５号窯跡（奈良後期～平安前期）が調査されている。

中世窯跡では、小松市二ツ梨奥谷１号窯跡（平安末―鎌倉初）、那谷大天王谷１号、２号窯跡（鎌倉後）、加賀市箱宮１号窯跡（平安末～鎌倉初）であり、集計すれば須恵窯跡で14基、中世窯跡で４基である。調査により判明した生産年代は６世紀末より鎌倉後期であるが、丘陵内には６世紀初葉の須恵器破片の地表散乱が認められ、窯跡の存在推定も不可能ではないと考えられる。仮に窯業生産開始が、すでに判明している６世紀後半からとしても南加賀の須恵生産の発祥地とすることができよう。また窯跡未確認ではあるが、小松市戸津３号、４号窯跡は平安末と考えられるところから、南加賀の須恵器終焉期の生産地でもある。中世窯跡は小松市那谷町小天王谷、カミヤ谷で未発掘ではあるが、室町時代の窯跡の存在を確認しているから、東西1,000ｍ、南北5,000ｍの南加賀古窯跡群の所在地域内の窯業生産は少くなくとも、６世紀後半より室町時代に至る期間継続されていたと考えられる。

すでに述べた如く、既往の調査により得た資料は断片的であって、南加賀の須恵器焼成技術が導入された初原の形態や、生産終焉に至る間の築窯や窯構造の変化、須恵器型式或は生産工程、工房跡、工人集落跡の時代的な流れが不明であり、また還元焔焼成の須恵器生産から常滑の技術の影響下に出現したと考えられる酸化焔焼成による加賀古陶の中世窯業生産への移行形態もまた不明である。たとえば昨日までは還元焔で須恵器を焼き、今日よりは分焔柱をもつ窯で酸化焔で

加賀古陶を焼いたと云うように、生産過程の変化は簡単にわりきれるものであろうか。窯業生産の革命的な生産工程の技術変化がそのように単純に受け入れられたものでない。技術変化の受け入れには、それに相応する文化的背景があったと考えたいのである。

こうした南加賀古窯跡群の調査な多くの未解決な問題を抱えている。調査不充分の原因としていろいろの事が考えられるが、その一つは既往の調査のほとんどは開発工事による緊急調査であって、系統的な調査が出来なかったことも理由の一つと考えてもまちがいはなさそうである。今回の調査は農道構築の工事により、窯跡断面が露出したために窯跡の存在を知り得たのが調査開始の発足であった。発掘調査による遺物の出土量は少なかったが、それでも南加賀の窯業生産過程研究の空白期の一部分を埋めることが出来た。それは単に空白期の或る時期の窯跡が発見されたと云うこともりも、窯体の構造、遺物の項で述べている如く、多くの新しい知見を提供してくれた。しかしこの新しい資料は、一窯跡の資料としてのみとらえるべきでなく、南加賀の窯業生産の変化過程の文化史の流れの中に窯跡の持つ意義を考えるべきものであろう。

最後に付記しておきたいことは、現在南加賀の土木開発は各地で急ピッチに進められており、埋蔵文化財の消失危険度も大である。緊急調査と云う時間に制約された不充分な調査よりも、今回のように腰をおちつけた調査が行わなければ南加賀の窯業生産を含めた古代史の実態が永遠に不明となる恐れがある。開発予定地の埋蔵文化財は開発工事開始に先立って、早急に調査体制をととのえなければならない事を強調しておきたい。　（上野　与一）

第四次石川県古窯跡発掘調査委員会規約

1　第四次石川県古窯跡（小松市戸津古窯）発掘調査事業（以下「発掘調査事業」という）を円滑に遂行するため「第四次石川県古窯跡（小松市戸津古窯）発掘調査委員会」（以下「調査委員会」という）を設置する。

2　「調査委員会」に次の各号より選出された委員若干名を置く。

(ア)　学識経験者

(イ)　石川考古学研究会々員

(ウ)　関係教育委員会教育長

3　委員長は委員の互選により決め「調査委員会」を代表する。会議は委員長が招集する。

4　「調査委員会」は発掘調査事業の実施に必要な基本的事項について審議する。

5　「調査委員会」は顧問及び専門委員を置くことができる。

6　「調査委員会」は第四項の審議により決定した発掘調査事業を実施するため「第四次石川県古窯跡（小松市戸津古窯）発掘調査団」（以下「発掘調査団」という）を編成する。

7　「調査委員会」の決定した事項及び事務の処理は石川県教育委員会事務局があたる。

8　「調査委員会」は発掘調査事業が完了したとき解散する。

発掘調査委員会名簿

顧問	三上次男	東京大学名誉教授
	楢崎彰一	名古屋大学助教授
	秋田喜一	石川考古学研究会常任顧問
委員長	川良雄	小松市文化財専門委員長
委員長代理	高堀勝喜	石川考古学研究会々長
委員	浜岡賢太郎	石川考古学研究会代表幹事
	上野与一	北陸大谷高校教諭
	槻木慶雄	石川県教育長
	根上淳朔	小松市教育長
事務局	本間敦胤	石川県教委文化財保護課長
	中田宏策	同　課長補佐
	川東栄	小松市教委社教課長
	小村茂	同　主事

発掘調査団名簿

調査団長	高堀勝喜	
団長代理	浜岡賢太郎	
調査主任	上野与一	
調査員	野尻与之佐	県立大聖寺高校教諭
	岩城襄一	山代中学校教諭
	藪谷栄一	小松地方教育事務所
	太田和夫	東和中学校教諭
	岡下穣	北陸大谷高校教諭
	土井輝男	県立工業高校教諭
	四柳嘉章	県立養護学校教諭
	山本七郎	県教委学校指導課
専門委員	広岡公夫	福井大学教育学部助教授
事務局	河崎与志雄	県教委文化財保護課係長
	平田天秋	同　主事
	宇佐美孝	同　嘱託
	小村茂	
	宮下幸夫	小松市教委社教主事補

図版 I

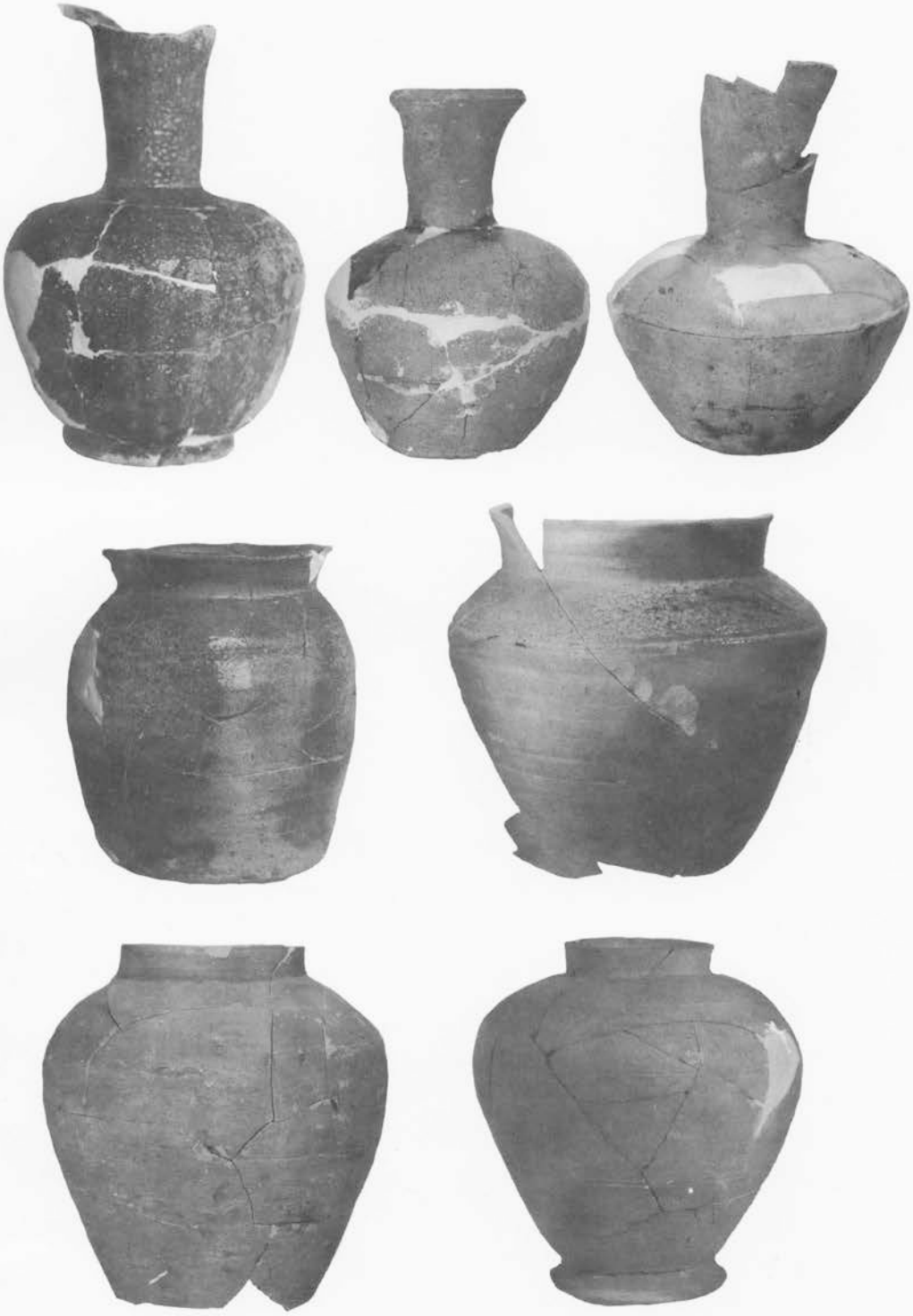
調　査　前

調査後全景

戸津5号窯跡全景

図版 III

図版Ⅳ



戸津5号窯跡
石川県古窯跡調査（第4次）概報
昭和50年3月20日　印刷
昭和50年3月31日　発行
発行者　小松市教育委員会
印刷所　㈲沖谷印刷所

※本書は石川県教育委員会が発行した「石川県古窯跡調査（第4次）概報」の別刷である。